

軽薄の人と交わらず

辻 憲男（文学部教授）

『雨月物語』は九つの怪異譚を収めている。佐藤春夫はそのなかで「菊花の約（ちぎり）」が一番いいと主張した。同席した谷崎潤一郎と芥川龍之介は軽く反対したが、谷崎はその後佐藤の意見に賛成した。

「青々たる春の柳、^{みその}家園に植ゆることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ」。中国の小説の翻案である。話は室町末期、加古の駅家（うまや）の里の清貧の士・左門は、悪病に苦しむ旅人・赤穴を献身的に看病した。春夏かけて快復した赤穴は、重陽の再会を約して本国の出雲へ帰った。ところが九月九日の夜になっても、姿をあらわさない。とその時、月光を透かして「ただ見る、おぼろなる黒影（かげろひ）の中に人ありて、風のまにまに来るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり」。喜んで招き入れたが、どうも様子がおかしい。語るを聞けば、なんと赤穴は城に幽閉され、本日の信義のために“魂は一日千里を行く”の言を信じて自害したのだという。亡霊は涙を流した。左門はただちに出雲に赴き、理を説いて義兄の仇を討った。

9世紀の中頃、勝尾寺の勝如上人は十余年間、物言わぬ行を続けていた。ある夜、柴戸をたたく音がする。咳ばらいで応じると、声は“我は加古の沙弥・教信（きょうしん）なり、日夜念仏を唱えて今日極楽に往生す、上人も某日必ず往生せん”と告げた。翌朝加古へ弟子をやって、その尊い最期を見届けさせた（今昔物語集）。聖が聖を知ること、かくのごときか。



加古川市野口町の教信寺。官馬40頭を備えた駅家の北辺。
出雲とは約170km、大阪箕面の勝尾寺とは約60km離れている。